

A-6 鳥取県中部および東部方言における平板型アクセントの音調配列の分布と変化
 桑本裕二 (公立鳥取環境大学)
 kuwamoto@kankyo-u.ac.jp

要旨: 鳥取県中部および東部方言は、一つ上がりアクセントと呼ばれる、平板型アクセント語で LLLH のように最終モーラのみ高音調となる特殊な音調配列を有する。本発表は当該方言の平板型アクセントの音調配列の通時的、共時的実態を考察したものである。発話調査の結果、中部方言では一つ上がりアクセントは極めて厳格に保持され、東部方言では中年層以下では、すでに initial lowering の起こる LHHH のような配列に移行していることが確認された。東部方言を中心に新たに発生した LHHH 型については、先頭が重音節である語について、HHHH 型の音調配列が広範囲に観察され、本来的に initial lowering を起こさない話者でもこの音調配列が支配的であることから、東京方言の影響は必ずしも関連していないことを導いた。また、特殊拍で終わる語であっても、LLLH のように特殊拍の直前で上昇調を起こすが、同種の環境を回避する傾向の強い東京方言とは異なる性質をもって音調配列がなされていることも示した。

1. はじめに

鳥取県の方言区域は東部・中部・西部の3地域に分類されるが(森下 1999 など)、このうち西部方言は、島根県出雲地方、隠岐地方とともに「雲伯方言」としてまとめられ(室山 1982:179)、倉吉市を中心とする鳥取県中部方言、鳥取市を中心とする鳥取県東部方言とは区別される。アクセントの分類上は、金田一(1977)によると、鳥取県中部および東部方言はともに東京中輪式アクセントであって、おおまかには単一のアクセント区域としてまとめることが可能で、東京外輪式である鳥取県西部方言とは、一線を画している。

鳥取県中部および東部方言は、アクセント体系は東京方言と同じでありながら、原則的には東京方言アクセントに典型的な initial lowering がみられない。当該方言では、起伏型アクセントであれば、下降調が起こるモーラのみ高音調でその前後はすべて低音調となる。平板型アクセントの場合は最終モーラのみか、後続する語のアクセント核が生じる直前まで低音調が続く(一つ上がりアクセント(森下 1999:15f.))。(1)は、鳥取中部・東部方言の「からす(鳥)ガ」(頭高型)「たまご(卵)ガ」(中高型)「おとこ(男)ガ」(尾高型)「さかな(魚)ガ」(平板型)の音調配列、(2)はそれに対する東京方言の語(鳥取西部方言も同様)を対比したものである。

- (1) [か]らすガ た[ま]ごガ おと[こ]ガ さかな[ガ]
 (2) [か]らすガ た[ま]ごガ お[と]こガ さ[かな]ガ ([:上昇調]: 下降調)

鳥取県中部・東部方言と東京方言のアクセント型の音調配列の違いは、尾高型(4モーラ以上の語であれば、+3,+4...型中高型も含む)および平板型アクセントの場合に確認できる。((1),(2)の網掛けの句)。平板型アクセントの場合、語が長くなったり(3a)、下降調アクセント核のない語が後続する場合(3b)は、最終モーラだけ高音調となるので、句全体が最終モーラ以外は全て低音調となり、同形の東京方言が第1モーラ以外全て高音調となるのと対照的である(4a,b)。

- (3) a. なかむらんくろ[ー(中村勘九郎)] b. ひとがずーっとならんど[る。(人がずーっと並んどる)]
 (4) a. な[かむらんくろー] b. ひ[とがずーっとならんでる。]

本発表は、分析対象を平板型アクセントに特化し、上に示した鳥取県中部・東部方言の平板型アクセントの音調配列について、主に、中部方言と東部方言での地域的な分布の多様性が認められるか、また、世代差による違いによって通時的変化の兆しが確認できるかを考察したものである。さらに、東京方言で initial lowering が起こらない場合があるとされる、第2モーラ特殊拍語(「と[ーきょー(東京)]」に対する「[とーきょー」秋永 2014)の、当該方言での音調配列や、平板型アクセントの最終モーラ特殊拍語(原則的には「とっきゅ[ー(特急)]」「にくま[ん(肉饅)]」のように特殊拍の直前で上昇調が起こる)などを分析し、鳥取県中部・東部方言の平板型アクセントの通時的変化、共時的変異の状況をまとめ、考察した。

2. 研究対象の地域について

森下(1999:18)は、鳥取県の方言区画を、東部方言・中部方言・西部方言の3つに区分しているが(図1参照)、室山(1982:179f.)は、雲伯方言に属する西部方言と、それ以東の地域が大きく2分されうるとしている。

本研究では、室山(1982)によって同一区画にまとめられた鳥取県中部および東部方言における、ア

クセントの地域的多様性が認められるか、また、世代を追っての、伝統的なアクセント（本発表では特に音調配列）がどのように変化しているのか、またそのあり方について、両地域で何らかの差異が認められるか、を考察したものである。また、森下（1999）のいう「一つ上がりアクセント」の実態をさらに追及するという意味合いもある。

調査地は、鳥取県中部方言に対しては、倉吉市、東伯郡湯梨浜町、同琴浦町、鳥取県東部方言に対しては、鳥取市、八頭郡八頭町である。図1で示したとおり、これらの市町はそれぞれの同一方言区域内にあって、互いに隣接しており、相互の地域差は比較的過小なものと同判断される。なお、鳥取市の一部は中部方言域に入っているが（旧気高郡の全域）、当該地域内での調査は行っていない。

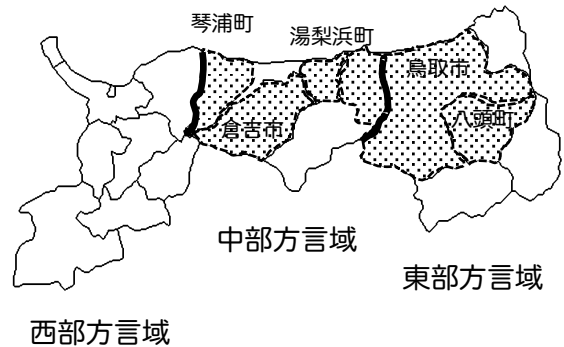


図1 鳥取県の方言区画と調査地の位置

3. 調査語について

3.0

調査語は平板語のみに限定した。その主な理由は以下のとおりである。

当該地域方言に典型的にみられる、一つ上がりアクセントは、音調配列に関しては、第1節(1)で東京方言の同種のアクセント型(2)と対照して示したように、頭高型、+2中高型の語では、東京アクセントの音調配列と区別されない。また、+3型かそれより後方の中高型および尾高型アクセント語は東京方言には非常に少ないため（窪蘭 2006:15、田中・窪蘭 1999）、東京方言アクセントと対照するには平板型アクセントがもっとも適していると判断された。

調査に用いた語は、鳥取県中部・東部方言と東京方言で同じく平板型となる語を選択した。

本節では、調査に用いた平板語の音節構造について、3.1 軽音節で始まるもの、3.2 重音節で始まるもの、すなわち、第2モーラが特殊拍となっているもの（促音は除く）、3.3 重音節で終わるもの、すなわち、最終モーラが特殊拍となっているもの（促音は除く）、に分けて、注目すべき点について述べる。

3.1 軽音節で始まる平板語

東京方言では、頭高型アクセント以外の語で、第1モーラが低音調で、2モーラ目から高音調となり、以降降格が起きるまで高音調が続くという現象がみられる。これを initial lowering（または initial dissimilation, Labrune 2012:154, Vance 1987:80 など）という。

- (5) a. 中高型：た[ま]ごが b. 尾高型：お[とこ]が c. 平板型：さ[かな]が

これに対し、鳥取県中部・東部方言では、原則的には initial lowering が起こらず、降格アクセントのあるモーラのみ高音調でその前後はすべて低音調となる。これは「一つ上がりアクセント」と呼ばれているが（森下 1999:15f.）、平板語の場合「一つ上がり」のモーラは句の最終モーラである。

(6) で示すように、平板語「さかな」について、単独か、後続する語の起伏の有無、全体の長さによって、「一つ上がり」の高音調の生じる位置が変わる。

- (6) さか[な さかな[が さかなカ[ラ さかなガオ[ル さかな[ニ]ハ

3.2 重音節で始まる平板語

東京方言では、重音節で始まる語、つまり、第2モーラが特殊拍の語の場合、initial lowering が起こらず、句の先頭から高音調となることがある（(7a-c) 服部 1980、秋永 2014:付9、Labrune 2012:154）。ただし、第2モーラが促音の場合は、initial lowering が起こらない形は現れず（例えば、(7d)「*きっぷ」）、先行するモーラと同じ音調が保たれる傾向がある（(7d) では「きっ[ぷ]」）。

- (7) a. 第2モーラが撥音： 餡蜜 あ[んみつ]／[あんみつ]
 b. 第2モーラが長音の後部要素： 掃除 そ[ーじ]／[そーじ]
 c. 第2モーラが二重母音の後部要素： 毎月 ま[いつき]／[まいつき]
 d. 第2モーラが促音： 切符 き[っぷ]／きっ[ぷ]／*きっ[ぷ]

この現象は、initial lowering が起こった場合に、特殊拍の直前に上昇調が起きるのを回避する手段であると考えられる。

鳥取県中部・東部方言で、同じく重音節で始まる平板語は、一つ上がりアクセントの音調配列に従って、(8a) のように最終モーラのみ高音調になる場合と、(8b) のようにすべて高音調になる場合が併存する。

- (8) 「餡蜜」 a. あんみ[つ b. [あんみつ

句頭から高音調が続く音調配列が、服部 (1980) などに従って、東京方言特有の、initial lowering を回避する手段の表れであるとするならば、当該方言で、同様の、全て高音調の平板語が出現し、なおも、(8a, b) のように両者が併存するのは極めて特異である。

本研究の調査語として、重音節で始まる語のうち、東京方言での initial lowering が関わらない、第2モーラが促音であるものを除いたものを扱う。

3.3 重音節で終わる平板語

当該方言の平板語は、単独であれば、語の最終モーラのみ高音調となる。これは、その語が重音節で終わる場合、最終モーラの特種拍のみ高音調となるので、結果として特種拍の直前に上昇調が現れることになる。

- (9) a. 最終モーラが撥音： 肉饅 にくま[ん
b. 最終モーラが長音の後部要素： 特急 とっきゅ[ー
c. 最終モーラが二重母音の後部要素： 誤解 ごか[い
d. 最終モーラが促音： (存在しない)

この音調配列が存在しうるのは、東京方言で、initial lowering の結果生じる同種の環境（特種拍の直前で上昇調が生じる）が積極的に避けられることとは関連しない事象であると考えられる。本研究ではこの種の音節構造の語もデータに含める。

4. インフォーマントについて

本発表に関する方言調査は、2019年2月から9月にかけて、鳥取県倉吉市、東伯郡湯梨浜町、同琴浦町（以上鳥取県中部方言域）、鳥取市、八頭郡八頭町（以上鳥取県東部方言域）の住民総計23名に対して行った。インフォーマントの詳細は (10) のとおりである。

(10) インフォーマントの詳細

- a. 鳥取中部方言話者：11名（倉吉市、東伯郡湯梨浜町、東伯郡琴浦町）
高年層（74～86歳）： 2名（男：1，女：1）
中年層（51～52歳）： 3名（男：2，女：1）
若年層（13～14歳）： 6名（男：1，女：5）
b. 鳥取東部方言話者：12名（鳥取市、八頭郡八頭町）
高年層（65～80歳）： 4名（男：1，女：3）
中年層（37～41歳）： 3名（男：0，女：3）
若年層（19～29歳）： 5名（男：4，女：1）

インフォーマントは全て当該地域の住民で、本人の父母の出身地も同地域か、鳥取県中部地区または東部地区の範囲を超えない近隣の地域の出生であることを確認している。

5. 分析と考察

5.0

本節では第3節で分類した調査語について、それぞれの語彙群の、鳥取県中部、東部方言の調査結果を示し、それに基づく考察を行う。

5.1 軽音節で始まる平板語の分析

軽音節で始まる平板語の分析結果は、中部方言は表1、東部方言は表2のとおりである。

表1 鳥取県中部方言の軽音節で始まる平板語の音調配列

		高年層		中年層			若年層					
		CS1M	CS2F	CM1M	CM2M	CM3F	CJ1F	CJ2M	CJ3F	CJ4F	CJ5F	CJ6F
1μ	か (蚊)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
2μ	たな (棚)	○	○	○	○	○	○	○	◎	○	○	○
3μ	さかな (魚)	○	○	○	○	○	○	H	◎	○	○	○
4μ	はちみつ (蜂蜜)	○	○	○	○	○	○	○	◎	○	○	○

○: 最終モーラのみ高音調 (LLLH) ◎: initial lowering を伴う (LHHH) H: 全て高音調 (HHHH) 以下の表と同じ

表2 鳥取県東部方言の軽音節で始まる平板語の音調配列

		高年層				中年層			若年層				
		ES1F	ES2F	ES3M	ES4F	EM1F	EM2F	EM3F	EJ1M	EJ2F	EJ3M	EJ4M	EJ5M
1μ	か (蚊)	○	○	◎	○	◎	◎	○	○	◎	◎	◎	◎
2μ	たな (棚)	○	○	◎	○	◎	◎	○	○	◎	◎	◎	◎
3μ	さかな (魚)	○	○	◎	○	◎	◎	○	◎	◎	◎	◎	◎
4μ	はちみつ (蜂蜜)	○	○,H	◎	○	○,◎	◎	○,◎	◎	◎	◎	◎	◎

表1, 表2を相互に対照すると、中部方言で、当該方言の特徴である最終モーラのみ高音調という、特有の音調配列がほぼ保存されていることがわかる。これは、高年層、中年層で網羅的であり、若年層に至っても、個人によっては initial lowering が支配的となるものの (CJ3F)、全体的には、一つ上がりアクセントに基づく音調配列が保たれている。

一方、東部方言では、一つ上がりアクセントに基づく音調配列は、高年層でもすでに失われ始め、中年層、若年層に向かうにつれて initial lowering の起こる場合が徐々に支配的になる。「はちみつ (蜂蜜)」に対する、一つ上がりアクセントの場合 (表1, 2の○の部分)、initial lowering のある場合 (同、◎) のピッチ曲線を、それぞれ図2, 3に示す。

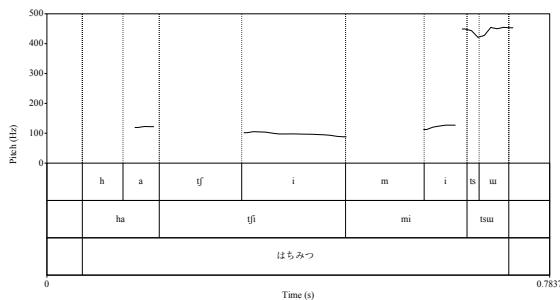


図2 一つ上がりアクセントの「はちみつ」のピッチ曲線

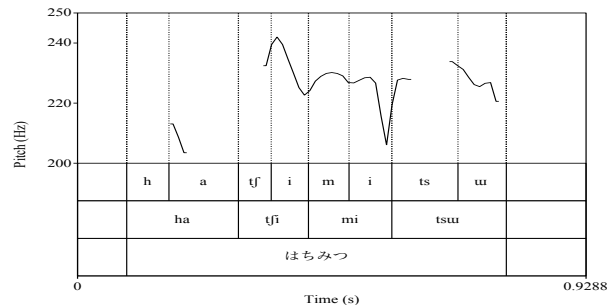


図3 initial lowering のある「はちみつ」のピッチ曲線

5.2 重音節で始まる平板語の分析

重音節で始まる平板語の調査結果は表3 (中部方言)、表4 (東部方言) のとおりである。なお、比較のために、東京方言話者に対する同様の調査結果 (インフォーマントは東京都練馬区出身、女性、21歳) も並記する。

表3の中部方言話者の調査結果からは、第2モーラが撥音の場合に一つ上がりアクセントの音調配列となり、その他の場合は全て高音調となる、というように、音素配列によってある程度の分布の差が見られた。また、世代差はほとんどみられなかった。その一方で、CJ5F, CJ6Fのようにほぼ一つ上がりアクセントとなっている個人も観察されたが、規範に合わせようという意識はたつき過ぎたせいとも考えられる。

表4の東部方言話者の調査結果からは、音素配列による分布の差は見られなかったが、高年層、中年層は、個人によるばらつきが非常に大きかった。一方で、若年層は、ここに挙げた調査語については、全て高音調になるという傾向が網羅的であった。

表3 鳥取県中部方言の重音節で始まる平板語の音調配列

		高年層		中年層			若年層						東京
		CS1M	CS2F	CM1M	CM2M	CM3F	CJ1F	CJ2M	CJ3F	CJ4F	CJ5F	CJ6F	
#CVN	てん (点)	○	○	○	○	○	○	H	H	H	○	○	H
	にんき (人気)	○	○	○	○	○	○	H	○,H	○	○	○	H
	あんみつ (饅蜜)	○	○	○	○,H	○	○	H	H	○	○	○	H
#CV:	ぼー (棒)	H	H	H	H	H	H	H	○,H	H	○	○	H
	そーじ (掃除)	H	H	H	H	H	H	-	H	H	○	H	H
	いーかた (言い方)	H	H	H	H	H	H	H	H	H	H	H	H
#Cai	はい (灰)	H	H	○,H	H	○,H	○,H	H	H	H	○	○	H
	たいや (タイヤ)	H	H	H	H	H	H	H	H	H	H	○	H
	まいつき (毎月)	H	H	H	H	H	H	H	H	H	○	○	H

-: 未調査

表4 鳥取県東部方言の重音節で始まる平板語の音調配列

		高年層				中年層			若年層					東京
		ES1F	ES2F	ES3M	ES4F	EM1F	EM2F	EM3F	EJ1M	EJ2F	EJ3M	EJ4M	EJ5M	
#CVN	てん (点)	○	H	H	○	H	H	○	H	H	H	H	H	H
	にんき (人気)	○	H	◎	H	○,H	H	○	H	H	H	H	H	H
	あんみつ (饅蜜)	○	○,H	◎	○	◎,H	H	○	H	H	H	H	H	H
#CV:	ぼー (棒)	○	H	H	H	◎	◎,H	H	H	H	H	H	H	H
	そーじ (掃除)	○	○	◎	○	◎,H	H	H	H	H	H	H	H	H
	いーかた (言い方)	H	H	◎	H	◎	H	H	H	H	H	H	-	H
#Cai	はい (灰)	○	H	H	○	◎	H	H	H	H	H	◎,H	H	H
	たいや (タイヤ)	○	○	◎	○	◎	H	○	H	H	H	H	H	H
	まいつき (毎月)	○	H	◎	○	H	H	◎,H	H	H	H	H	H	H

当該方言話者のデータから、全て高音調になる例 (図4)、一つ上がりアクセントが適用されている例 (図5) のピッチ曲線を示す。

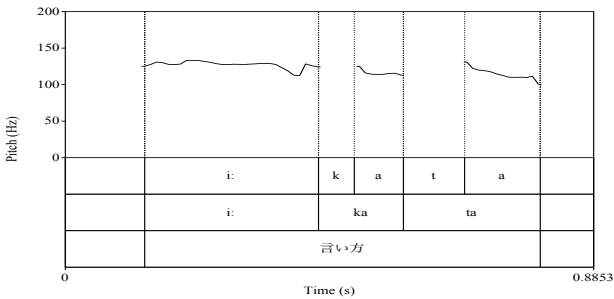


図4 「言い方」のHHHHピッチ曲線

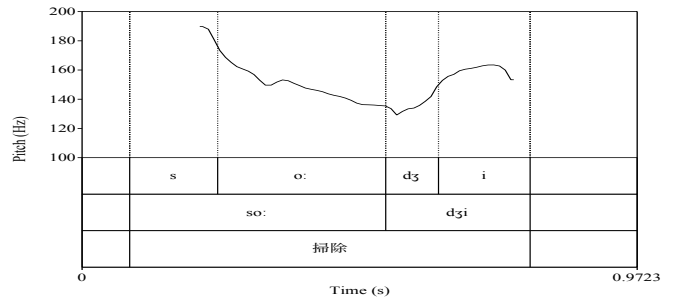


図5 「掃除」のLLHピッチ曲線

比較の対象とした東京方言話者のデータが、すべて高音調という音調を示しているのは極めて特徴的なことである。服部 (1980:370) は、「(全て高音調)のように発話する人が少なくない。」とし、秋永 (2014:付9) は「(そのように) なることがある。」と述べており、いずれの記述も、本来的ではないが選択的にそういう音調となる、としているに過ぎない。服部 (1980:370) は同箇所、「(この現象は) 一音節内に昇り音調が現れるのをきらってこの部分が平ら音調をとったものとも説明できる」と解釈しているので、この東京方言話者が、その傾向を強く出している結果であると思われる。ただし、この傾向が、インフォーマント個人に帰するものなのか、若年層世代全般の傾向なのかはデータを増やさなければわからない。いずれにしてもこれは本研究の考察の範囲外である。

中部方言の全ての年齢層、東部方言の高年層などに多くみられる initial lowering を全く示さない話者が、全て高音調の音調配列で発話するのが観察されるが、これは、音調配列は同じでも、服部 (1980:370) の主張とは無関係に生じていると言わざるをえない。これを裏付ける特徴は、5.3 節でも扱うことになる。

5.3 重音節で終わる平板語の分析

当該方言の一つ上がりアクセントで平板語を発話する場合、重音節で終わる平板語、つまり、特殊拍（促音を除く）で終わる平板語は、その特殊拍の直前で上昇調が起こることになる。つまり、次の (11) のようになる。

- (11) 肉饅：にくま[ん 相撲：すも[ー 話し合い：はなしあ[い

(11) のそれぞれのピッチ曲線を図 6, 7, 8 に示す。

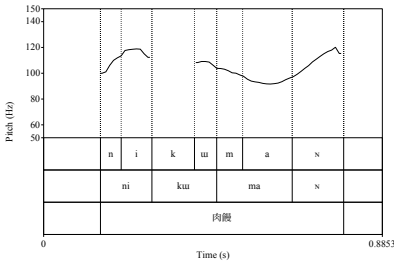


図 6 「肉饅」

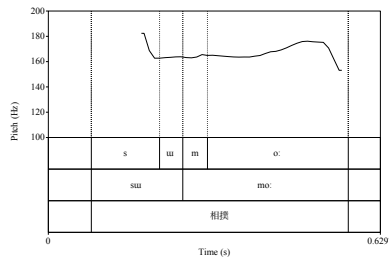


図 7 「相撲」

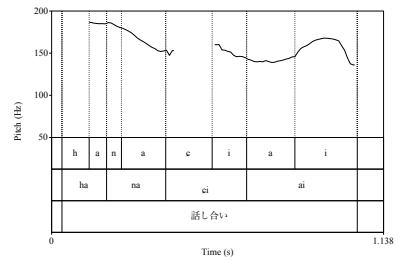


図 8 「話し合い」

このような重音節で終わる語の、助詞や後続語を伴わない単独による発話の分析結果は以下の表 5 のとおりである。なお、表 1 および表 2 において、initial lowering が起こったインフォーマントなど、一部のデータは省略している。

表 5 鳥取県中部・東部方言話者の重音節で終わる語の音調配列（一部抜粋）

		中部方言								東部方言			
		高年層		中年層			若年層			高年層			
		CS1M	CS2F	CM1 M	CM2M	CM3F	CJ1F	CJ4F	CJ5F	CJ6F	ES1F	ES2F	ES4F
CVN#	やかん (薬罐)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	にくまん (肉饅)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○,HH	○,HH	○
CV-#	すもー (相撲)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	とっきゅー (特急)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	じみんとー (自民党)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Cai-#	ごかい (誤解)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ななかい (7階)	○	○	○	○	○	○	H	○	○	○,HH	○,HH	○,HH
	はなしあい (話し合い)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

HH: 最終 2 モーラのみ高音調 (LLHH)

このように、一つ上がりアクセントをほぼ網羅的に保持してる話者は、全体的に見て、この種の音節構造の語に対しても同じように最終モーラのみ高音調、つまり、特殊拍の直前で上昇調をみせている。特に、中部方言においては、この様な上昇調を回避する手段はとられないようである。一方、東部方言話者に限られるが、最終 2 モーラが高音調となって、上昇調が 1 モーラ前にずれて生じることが、散見される。

- (12) にく[まん (ES1F, ES2F) なな[かい (ES1F, ES2F, ES4F)

この例からは、服部 (1980) の高音調で始まる音調配列（または、特殊拍の直前で上昇が起こらないこと）に対する主張が、敷衍的に機能しているといっている。ピッチ曲線は図 9 のようになる。

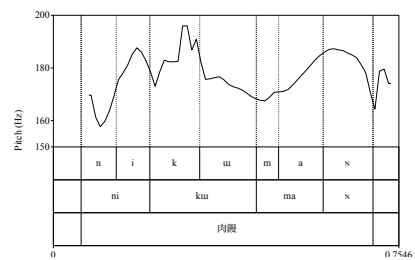


図 9 「肉饅」(LLHH) のピッチ曲線

5.4 全般的な分析結果の考察

5.1 節から 5.3 節までで示した、様々な音節構造の平板語の音調配列の分析結果からは、およそ次のことがいえる。

鳥取県中部・東部に共通してみられる一つ上がりアクセントの音調配列は、中部方言では各年齢層で依然支配的であり、東部方言では高年層で保持されているが、中年層以下ではほとんど観察されず、代わりに東京方言と同様の initial lowering のある、低起で 2 モーラ目から高音調に上昇する音調配列が支配的となる。中部方言では、調査した 11 名のインフォーマントのうち、若年層の 1 名を除いて initial

lowering は観察されなかったが、当該地域ではこの種の音調配列は通時変化をほとんど受けず、極めて厳格に保持されているといえる。一方で、東部方言では、高年層で既に initial lowering が認められ、中年層以下では伝統的な音調配列はほぼ皆無となる。鳥取県東部地域では音調配列の激しい変化が既に起こっており、全年齢層を包括的にみるならば、その変化の移行は終了しかかっているといっている。

しかしながら、この変化について、東京方言の影響の結果であるとするには慎重になるべきである。東京方言では、先頭が重音節の語が、initial lowering の結果、特殊拍の直前で上昇調を起こすのを回避する手段として、高音調の連続で始まる音調配列を許容する。しかし、当該地域、特に中部地域では、軽音節で始まる語に initial lowering がほとんどみられないにもかかわらず、重音節で始まる語にみられる高音調で始まる音調配列が支配的か、一つ上がりアクセントと共存しているから、当該地域に見られるこの種の音調配列が、initial lowering を回避した結果とは考えられないからである。

また、重音節で始まる語の高音調連続が、特殊拍の直前での上昇調を回避した結果であるとする服部 (1980:370) の主張は、initial lowering のほとんどみられない当該方言において、「やか[ん]」「すも[一]」「ごか[い]」のような音調配列が、許容されるどころか、この音節環境ではむしろ支配的であるということからして、関連してはいない。ただし、東部方言で散発的に「にく[まん]」「なな[かい]」のような、服部 (1980) の主張に従っているとみられる例も存在する。

6. おわりに

本発表における方言調査およびその分析を考察した結果をまとめると、以下のとおりとなる。

1. 鳥取県中部および東部方言において、両地域に共通してみられる一つ上がりアクセントは、平板型アクセントを調査した限りでは、両地域に幅広く観察されるものの、東部では中年層以下ではなくなりつつある。その一方で中部方言では中年層、若年層でもはっきりと保存されている。
2. 重音節で始まる語は、語頭、または句頭から高音調の連続となる場合が幅広く見られた。これは、東京方言において、initial lowering が起こった場合の、特殊拍の直前での上昇調を回避した結果として同様の音調配列になったのとは異なる理由によるものと考えられる。そのため、東部方言に出現しつつある initial lowering が、東京方言の影響によるものであるとは必ずしもいえない。
3. 2.に関連して、当該方言では、特殊拍の直前での上昇調が回避されるべきであるという音調配列上の傾向は、服部 (1980) の主張に反してそれほど強くは働いていないようである。これは、重音節で終わる語が、「にくま[ん (肉饅)」「すも[一 (相撲)」のように、特殊拍の直前での上昇調がむしろ積極的に現れるという例からも実証できる。ただし、東部方言高年層のインフォーマントの中に、「にく[まん (肉饅)」「なな[かい (7階)」のような、特殊拍直前の上昇調を回避する例も、散発的ではあるが観察された。

これらの結論からは、① initial lowering は東京方言の決定的な特徴とみなしてもいいのか、② initial lowering と一つ上がりアクセントは対立する現象ととらえていいのか、など、一つ上がりアクセントを鳥取県中部・東部方言の際だった特徴として記述する際に問題となる議論は山積している。また、本発表では扱わなかったが、+3以降降格の中高型アクセント、尾高型アクセントの場合の調査、分析、また、当該方言の各アクセント型の出現頻度と本発表の結果との関連性をさぐることなど、残された課題は多くある。

【参考文献】

- 秋永一枝 (2014) 『新明解日本語アクセント辞典 第2版 CD付き』東京：三省堂。
金田一春彦 (1977) 「アクセントの分布と変遷」『岩波講座日本語 11 方言』129-180, 東京：岩波書店。
窪園晴夫 (2007) 『アクセントの法則』東京：岩波書店。
田中真一・窪園晴夫 (1999) 『日本語の発音教室 理論と練習』東京：くろしお出版。
服部四郎 (1980) 「音韻論から見た国語のアクセント」柴田武他編 (1980) 『日本の言語学 第2巻 音韻』364-403, 東京：大修館書店。(『国語研究』2-3号 (1954) からの再掲)
室山敏昭 (1982) 「鳥取県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 8—中国・四国地方の方言—』175-209, 東京：国書刊行会。
森下喜一 (1999) 『鳥取県方言辞典』鳥取：富士書店。
Labrone, Laurence (2012) *The Phonology of Japanese*, Oxford: Oxford University Press.
Vance, J. Timothy (1987) *An Introduction to Japanese Phonology*, Albany: State University of New York Press.

※本研究は JSPS 科研費 JP17K02687 の助成を受けたものです。